

(フランス生活日記)

「あなたは英語を話しますか？」

川口幸宏

フランスは今英語ばやり。英語教室に始まり、英語教材等々の宣伝は喧しいほど。それにあやかっか、習いたての英語の腕を試すつもりなのかは知らないが、よくもまあ、中学生・高校生とおぼしきお嬢さんに声をかけられる。こしゃくにも、「Do you speak English? あなたは英語を話しますか？」と話しかけてくる。ぼくなどが学校で習ったのは「Can you speak English? あなたは英語が話せますか？」であって「話しますか？」ではなかった。

「Do speak? 話しますか？」と「Can speak? 話せますか？」とは天と地ほどの違いがあるとは、露ほどにも知らなかった頃、はじめてのフランス旅行の時—1996年—、南フランスのヴォンス市で、セレスタン・フレネ生誕 100 周年が開かれ、記念行事が行われていたのでぼくも参加していた。主催者の挨拶の中で、フレネ学校が経済的危機に見舞われたとき、世界中から存続を願う請願書が文部大臣に寄せられたが、日本からは請願書だけではなく多額の援助資金が寄せられ、危機を乗り越えることができた、この会場にその一人の日本人が参加している、と紹介された。幾人かのフランス人がぼくの方に話しかけてきたが、まったく理解不能の言語の嵐の中に立たされたぼくは、一番よくしゃべる人に向かって「Can you speak English?」と問いかけた。それは、私はフランス語が理解できませんので、英語ができるのなら、英語でお願いします、という、日本社会では比較的謙虚な物言いの序論のつもりであった。ところが、その人は「Of course!!」と言ったとたん、猛烈な勢いで英語をしゃべり始めたのである。明らかに、多少怒りを持ち、多少侮蔑を以て…。その時以来、ぼくは、「できる」と「する」という行為表現の言語に対して、多少ナイーブになっているほどである。

なるほど、アメリカに行ったときもそうであったが、フランスでの生活の中で、一度たりとも Can do? とたずねられたことがない。「できるか?」という問いの仕方が、いかにも相手を下に見ている、という意味なのだなどと分かってくる。英語を常用語としていないぼくたち日本社会から見れば、非・常用語の英語ができますか? というのは、「できる」という応えが返ってきたら半ば尊敬の念を抱き、「できない」と言われれば、いよっ! ご同輩! と連帯の念を抱くのであるけれども。

とにかく、「あなたは英語が話せますか?」ではなく、「あなたは英語を話しますか?」と声をかけられることがじつに多いのである。しかもその声かけの主は、決まって 10 代半ばのお嬢さん。はじめの頃はどぎまぎして、なかなか声も出せなかった。そのうち、ア・リトル、と応えるようになった。その何度目かの時、日本人は、必ずア・リトル、という、

と笑っていることに気づいた。事実、ほんの少ししか話せないのだから仕方がないよと思いつつ、その一方で、これは日本人の謙虚さなんだよ、と内心で自己弁護をする。しかし、それが却ってこれらお嬢さん方にとっては尊大な姿勢を持たせることに気づいてからは、**Of course! But, I have been staying heir, in Paris. Now, only French, I speak! You see?**とまくし立てることにした。ブローケン・イングリッシュは承知の上である。要は、ぼくは観光旅行に来ているガイジンなのではなく、パリで生活しているエトランジェ（異邦人）なのだと彼女ないしは彼女たちに伝えたいわけである。それでもぼくに何かご用があるの？英会話の試験台だったら、ごめんだよ、とも。

英会話の試験台としてのご用を務められないと分かると、エクスキューゼ・モア（許してね）の挨拶を残して立ち去ってくれる。もちろんぼくは、ジュヴザンプリ（どういたしまして）と挨拶を返し、オーヴォア（さようなら）と別れの言葉を出す。時にはいたずら心が湧いてきて、アビアントオ（またあおうね）と笑う。彼女ないしは彼女たちも笑いながら立ち去っていく。

英会話の試験台兼追い剥ぎ？という、遅いお嬢さんも少なくない。「英語を話しますか？」という問いが後ろからかけられる。いきなりのことなので、イエス、と条件反射的に応えてしまう。お嬢さんは側面に位置を変え、「〇〇なので 2 フラン、お金を下さい。」と手を出す。〇〇は、もう帰りが遅くてバスがなかなか来ない、タクシーで帰りたいけれども友だちとお金を出しあっても少し足りない、という理屈がつくときもあれば、正直に？遊びすぎて帰りの電車賃がない、というときもある。2 フランでは、タクシー代はおろかとてもバス代、地下鉄代など出ないだろうと思うし、水を買うにしても足りない。公衆トイレの値段が 2 フランだから、ああ、トイレに行きたいけれど、小銭を持っていないのだろうかなどと親切心が湧いてくることもあるが、いずれも、ノン！の返事をする。やっぱり、物乞いはよろしくないと思うからだ。拒否の返事にあってもたじろがないのは、かなりの強者だろう。拒否の返事にあって、エクスキューゼ・モアと、すごすごと立ち去るのはまだ「訓練」が足りないのだろう。

それにしても、フランスという国では、物乞いがごく当たり前のようになっている、とてもとても、日本語の「乞食」という概念には当てはまらないほど、あっけらかんとしている。もちろん、「乞食」そのものも少なくないのだけれども。地下鉄の中では毎日のように、「昨日から何も食べていない」だの、「亭主が失職して、この子に食べさせるものが無い」だの、「自分は学生だが、本を買いすぎて、この 3 日何も食べていない」だの、中には、5 分（と思われるほど長く感じる）演説をした後、やにわに手をにゅっと顔先に付きだしてくる者もいる。その 5 分の演説の中身は、やはり、失業中が多い。路上では、「ひもじいです。S.V.P」と書いた紙を手を持ち、前には空き缶という、伝統的「乞食」スタイルが待っている。せめて車道には物乞いがいないでほしいと思いきや、段ボールに「失職中。何も食べていない。2 フラン以上、お恵みを。S.V.P」と大きく書いて、車の行き交う中を仁王立ちしている。高級ウイスキーの名前のような省略文字は「お願いします」という意味で

ある。これらは地方都市に行っても変わらない光景である。そして不思議なことに、これらの物乞いの仲間には、アジア人は一人もいない。いや、一人も出会っていない。

お嬢さんたちの「物乞い」と、生活がかかっていると訴える「物乞い」と、どこがどう違うのか。方やお遊び、方や生きるため、などと言うつもりは露もない。ただ、お嬢さんたちの「物乞い」は、遊びのつもりで始めたのが、「親にせびらずともお金が入る、多少の勇気があれば。おまけに、英語の勉強にもなる」という習い性を産み、やがては、いきなりバッグを奪う犯罪に手を染めていく者も少なくないと聞く。事実、ぼくの身近にいる日本人の一人が、そうした被害に遭っているのだ。

思わずコートを脱いでしまいたくなるほど暖かな冬の日、路上のベンチに座ってボーとしていたら、肩をポンポンとたたかれた。欧米系の顔立ちではないお嬢さんが、**Are you speak English?** と声をかけてきた。ねえ、お嬢さん、その英語、間違ってますよ、と言おうと思ったけれど、それより先に、お嬢さんが話を続けた。彼女の片言英語を、日本語風に転じてみると、「私、スカンジナビアから、います。来るの、楽だけど、帰るのは、とても易しくない。お願い、40 フラン。」と言う。これまでの物乞いお嬢さんたちと違うところは、英語がぼくと同程度に下手である、そして高額な物乞いであるということだ。40 フランと言え、日本円に直して 2001 年現在現在、560 円程度である。日本のお嬢様、おぼっちゃまだったら、道に落ちていても拾うこともないほどの額かもしれないけれど、何せ 2 フランの物乞いをするお国での 40 フランは、いかにも高額である。

「スカンジナビア？」

「イエス」

「スカンジナビアって、どの辺にあっただけ？」

もちろん、本当のことかどうか、ぼくの彼女に対する「試験」である。「どの辺」ということがうまく伝わらなかったのか、彼女が聞き取れなかったのかは分からないけれど、土の上に地図を書いて、「スカンジナビア？」と訊ねたら、ちゃんと半島を書き足して、**Scandivanes** とフランス語スペルで書いてくれた。

「ぼくは日本人だけど観光旅行に来たんじゃない、だからそんなにお金があるわけじゃない」、とはぼく。「仕事を探しにフランスに来たけれど、全然仕事が見つからない、諦めて国に帰りたいけれど、帰りの旅費がない」、とは彼女。「大使館に行ったら？」「嫌です。」「困ったね。」「お願いだから 40 フラン下さい。」最後にはとうとうぼくの方から、「ジャ・ビッタ・パリ、ジュ・ネ・パ・トラヴァイユ、ヴー・ヴォイエ？（私はパリに住んでいます。仕事がありません。お分かりですか？）」と、フランス語で「半分の嘘」を言った。**Do you hangry?**と、やはり片言英語で彼女が訊ねてきたので、イエス、ウィ、と返答した。彼女は黙って、立ち去っていった。

本当に彼女がスカンジナビア人なのかどうなのかは分からない。だから、本当に帰国のお金がいるのかも分からない。もし本当だとしても、ぼくは、やはり彼女の「物乞い」には応えないだろう。本当であろうが嘘であろうが、ぼくから 40 フラン貰ったとした

ら、やはり彼女はまた、他の人にせびるだろう。その繰り返しの中で、犯罪の道へと落ちるかもしれないのだ。

かくも簡単に「物乞い」をなさしめる国・フランスは、若い人たちに行きずりの誘惑を与えてしまっている。事実、女子中高学生のスリ、男子中高学生の強奪事件が相次いでいるフランス共和国である。フランス社会から「物乞い」を無くすことは可能なのだろうか。一介のエトランジェがお節介を焼くことではないけれども、「物乞い」はかなりのパーセントでフランス社会の矛盾の現れである。ヒューマニズムでは何の解決にもならないのも事実だろう。しかし、個人が「物乞い」とどう関わるか、ヒューマニズムしかないのも事実なのである。そのヒューマニズムさえも動員することができないのは「あなたは英語を話しますか？」のお嬢さんたちである。

それにしても、ベンチの前を、ルイ・ヴィトンの茶色の紙バックを提げて通りすぎていくのは、物乞いをするお嬢さんとほぼ同世代の日本人ばかり。きわめて対比的な光景に会うたびに、物乞いが必ずしも社会悪とは思えなくなる自分もいることに気づくのである。

(追記) フランス共和国に研究を目的として渡るようになって 5 年が経つ。そして年を追うごとに「物乞い」の数が増えていること、明らかに小学生と思われる子どもの「物乞い」が目立つようになっていること、さらにはパリ・地下鉄名物の「車内演奏」の音楽の質の低いのが目立ってきていることに気づく。パリ・地下鉄車内の音楽演奏はかなり長い歴史があると聞くが、果たして「物乞い」はどれほどの歴史なのだろうか。ある生粋のパリジャンによれば「20 年ほど前から物乞いが出始め、10 年ほど前から数が増えている」とのことである。音楽の質の低さもそれと無関係ではあるまいと想像する。この 20 年、10 年という数字には意味があり、フランス共和国が移民を受け入れ産業発展を目指したこと、そしてその停滞によって移民が職を失ったことと重なっている。しかし、現在、「物乞い」は組織化されており、必ずしも「物乞い」者当人の収益につながってはいないというヤミの部分もあるそうである。それらに対して、「物乞い」の自立支援組織があり、その集団が、パリのレストラン案内などのパンフレットを作成し、それを地下鉄車内で販売している。